

黙示録の記録

第7章 大患難における 聖徒たち

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

- 第5章 小羊が相応しい
- 第6章 創造主の大いなる怒りの日
- 第7章 大患難における聖徒たち
- 第8章 外からの攻撃を受ける地球
- 第9章 悪魔的災害

第7章 大患難における聖徒たち

御使いたちと自然界

黙示録の七章は大いなる巻物の第六の封印と第七の封印の開示の間に差し挟まれており、必ずしも前の章と後の章の出来事が起こった時の経過を示すものではありません。また一方では、「この後、私は見た…」で始まり、この出来事は第六の封印が解かれた時、黙示録6章12〜17節に書かれている大地震が起こるまで始まらない事を示しているようで、六章の終わりは将来の出来事を考えているようです。したがって、最後の封印が解かれ、その結果起こる第七のラッパがもたらす裁きの直前にヨハネ（と私たち）を勇気づけるために、ある程度本題から離れて解説しています。それゆえ、全体として、黙示録七章の出来事の順序は六章の地震のすぐ後に取り上げられたようです。とはいえ、七章はまた、七年の患難期の始まりを振り返って見ているし、

大患難の終わりと新しい地球における永遠の状況をさえ期待しているのです。

黙示録7章1節 この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押え、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。

「これらのこと」(最初の六つの封印に記されているさばき)を見た後、ヨハネはさらに一つのおどろくべき光景を見ました。ヨハネは、地の四隅に立って、四方の風を押えている4人の力ある天使たちを見たのです。この節は、地球の構造についての幼稚な近代科学前の考えを反映するものとして長い間嘲笑されてきました。一つの考えは、地球は四隅をもった平坦なものと思われず、けれど、それは黙示録20章8節にある地の「四方」と訳されているのと同じことば(ギリシヤ語 *gonia*)です。現代の科学技術によれば、それは船乗りや地質学者が本質的に羅針盤の四方とか四つの方向と呼ぶのと同じです。「四方の風」に関する言及からも明らかで、このことばは一般的な用語で、東西南北からの風を指すはずです。

挿入のことばとして、最近の正確な測地学的測定は地球には実際に「四つの隅」があることを証明しています。これらは基本的ジオイド、地球の基本的球形から突出しています。地球は実は完全な球形ではなく、両極が僅かに平らですので、少し平らになっています。地球の赤道附近の膨らみは、おそらく地軸の回転によって引き起こされ、その四隅がそこから突出しているのです。しかし、この節の意味は、確かに御使いが地上の四つの異なる重要な地点、おそらく両極に一人ずつ、赤道の直径の地形学的に相反する二つの端に一人ずつ置かれていて、地球の風を左右する大気流を統制出来るのです。

この節は創造主の力ある御使いがもつ能力と働きの一つに関して、注目し値する洞察をしています。被造物として、御使いは全能ではないが、力を發揮します(詩篇103篇20節)。創造主に従って、大いなる知恵と力をもって、御使いは創造主がおつくりになった自然界の系統と力を、ある程度知り制御出来ます。ヨハネが特にこれら四人の御使いを最初に見た時、すでに御使いたちは、地球の大いなる風の系統を差し止めるすばらしい大仕事を始めていました。そして、風は陸地にも海にも吹かないようになっていました。大気の循環は強力なエンジン(発動機)で、太陽からのエネルギーと地球の回転によって駆動されます。大ハリケーン(台風)、大吹雪、竜巻の形で現わされる時、この働きに関与する凄まじい力が特に明らかになります。水の循環を通して地上での生命活動を可能にします。すなわち、これらの風は海洋から内陸へ地球の水を運搬します。けれど、御使いが、わずかに四人でこの巨大なエンジンを止めてしまいました。

この現象は、ヨハネが気付き記録する前にも幾つかありました。恐らく、第三の封印の裁きで世界が経験した大飢饉と結びついています(黙示録6章5、6節)。それは大患難の最初の三年半の間、創造主が地上に雨が降らないという二人の証人(黙示録11章3、6節)によって呼び出された裁きを奇跡的に維持された手段でもありました。地球における大気の循環系がなくては、雨はありえませんが、海洋から蒸発する水は大気圏高く上昇し、最終的に地球を取りまく空高く広がります。

第六の封印の下での隕石または小遊星の落下によって惹き起こされる大気の攪乱は、これらの水蒸気を落下させるかも知れないし、又は上空へと水蒸気を引き上げるかも知れません。さらに世界的規模の地震に伴う火山活動は、大気の上空に莫大な量の水蒸気を噴出するに違いありません。この両現象は大洪水前の原初地球を覆った暖かい水蒸気の大蓋「大空の上の水」(創世記1章7節)を再び構成するのに若干役立つはずで

しばらくの間、大なぎが地上にありました。地上にはそよ風も吹かず、森では木の葉もさらさらと鳴らず、海岸では波も砕けません。

黙示録7章2節 また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける創造主の印を持って、日の出るほうから上つて来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。

それから、ヨハネはもう一つ大変不思議なことを見ました。東の地平線上にもう一人の力ある御使いが現れました。ある人はこの御使いはキリスト御自身に違いないとさえ示唆しています。太陽のように、ゆつくりと御使いは東から昇って来、昇って来る時、彼は、地の四隅に位置していた4人の御使いに十分にとどくくらいの大声で叫ばれました。

風が吹き付けるのをとどめていた四人の御使いは、地と海の両方を損なう力をもっていました。彼らが造り出していた干ばつは結局川と湖を干上がり草木を枯らし、最後に広範な災害と飢饉をもたらします。

しかし、東から昇って来た偉大なる御使いは、激しく燃え盛る太陽のように昇って来たが、創造主の僕のために恵みのメッセージをもっていました。さらに彼は生ける創造主の印を持って来たのです。

この印の特徴は、確かに創造主の特別な僕であることを示すことです。これら創造主の僕たちは、その印によって地上に来る創造主の直ちに起こる裁きばかりでなく、後に来る裁き〔黙示録9章4節〕からも護られるはずでした。彼らは達成すべき特別な使命をもっており、少なくともその与えられた使命を達成するまで創造主によってもたらされる自然界への裁きからもまた護られるはずで、これは、古代のユダヤ人がエジプト

で自然界に下された創造主の裁きから護られたのに似ています。〔出エジプト記9章6節、26節、10章23節、11章7節〕

少なくとも、教会時代に、聖霊は創造主の証印と呼ばれており〔エペソ人への手紙1章22節、エペソ人への手紙1章13節、4章30節〕、心からイエス・キリストを救い主と信じている信者一人一人を、最後の贖いの日まで彼の魂がキリストにあつて実際に安全に護られることを保証しています。もちろん、創造主はどこにでもおられるので、なお、この患難期にさえ新しい信者にこのように印を押しつづけます。これは、少なくともある点で、この御使いの働きの意味かもしれません。

しかしながら、この特別な押し印、聖霊による救いの証印であることは確かですが、そのほかの目的として、印を押された人々を実際に来る自然災害から保護する目的を持っています。こうして地上に来る創造主の裁きによって、邪悪なものと共に彼らが滅ぼされないように保護するのです。

黙示録7章3節 私たちが創造主のしもべたちの額いに印を押ししてしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。

第六の封印に従った裁き（地震、天の星が地上に落ちるなど）の後、地上に短い小休止がありました。この小休止は創造主に敵対する者たちに彼らをおそれから立ち直らせ、彼らが経験したそれらの裁きが自然の過程で起こったと合理的に考えさせ、以前よりひどい邪悪な状態に凝り固まる機会を与えるはずで、しかし、その主な目的は、創造主を信じたばかりの人々に、彼らの与えられた新しい信仰を理解し、創造主のこ

とばを学び、彼らが通過している出来事の整然とした意味を認識する機会を与えることでした。迫害の燃え

さかる炉の中においてさえ、数えきれないほどの新しい信者が出てきました。古代の預言者ハバククの「主よ、この年のうちに、これを新たにし、この年のうちにこれを知らせてください。怒る時にもあわれみを思いおこしてください」〔口語訳ハバクク書3章2節〕との祈りは聴かれました。

特に、これは創造主の僕である特殊なグループそのものを準備するために必要不可欠のことでした。彼らは患難時代の後期と、それについて来る千年期に世に証しする大切な役割をもつことになっていました。もし彼らが重大な使命を達成するために彼らがいるとするなら、彼らは霊的にも準備され、肉体的にも保護されなければなりません。それゆえ、彼らは「額に印を押」されなければなりません。

おそらく、この額に印を押すという異常な行為ですが、ある程度は、心（額は、脳の前頭葉に対する隠された言及）で感知しなければならぬ特別な教訓と理解に対する言及で、こうして彼らがこれからまさに来ようとしている年月に有効な証人、指導者になり得るのです。彼らは、創造、贖い、そして現に進行中の壊滅的出来事による裁きの創造主の大いなる目的を理解するために、聖書とその重要性を学び取るため集中した時間を必要とするのです。

しかしながら、この刻印はおそらく額に押された実際のしるしをも意味すると取ってよいでしょう。そしてこの印は彼らに出会うすべての人々が、彼らを創造主の特別な保護の下にある僕だと判るのです。この行為は来るべき世界総統である獣が、不敬虔にもまもなく真似るでしょう。彼は「その右手かその額かに、刻印を受け」るように彼につき従うすべての人に要求します〔黙示録13章16節〕。しかしながら最終的にこの刻印は「そのしもべたちは創造主に仕え、創造主の御顔を仰ぎ見ます。また、彼らの額には創造主の名がついている」〔黙示録22章3、4節〕時、永遠に身分証明書としての素晴らしいバッジとなりすべての聖徒を結び付けます。実際に、

御使いが彼らの額にどのように刻印するか、またその印章が何であるかは示されていません。この刻印の受け取り人がどのように選ばれるかも知らされていません。しかしながら、創造主の民が捕囚に連れて行かれたような創造主の怒りによる裁きの間、古代イスラエルの人々に起こった事例と何か似ています。イスラエルにいたすべての人は創造主の印が額に押されている人々を除いて殺されるはずでした。「この町で行われているすべての忌みきらうべきことのために嘆き、悲しんでいる人々の額にしるしをつけよ。」と命じられ〔ゼキエル書9章4節〕、創造主の印はつけられました。エルサレムの邪悪さに反対して叫んでいた人々を除いて、その邪悪さのゆえに滅ぼされることになりました。

恐らく、これもまた将来の裁きにおける基準となります。これら患難期の最初の2〜3年の間、多くの群衆が創造主に立ち帰ります。特に、このことは、ゴク（ロシア）からの注目すべき救出（解放）がなされたイスラエルに当てはまり、裁きの期間が始まる前においてさえ、全国民に精神的ショックを持続的に与えていました。このことを信じている多くのイスラエル人たちは、さらに踏み出します。そして、メシアとしてまた救い主としてキリストを受け入れ、彼らはまもなくキリストを率直に証し始めます。そして、詩篇2篇10〜12節やローマ人への手紙1章16節にあるように、時が遅くなる前にキリストを受け入れるよう、同国人、そして事実上全世界の人々を導こうと熱心に捜し求めます。おそらく主が御使いを通して主の刻印を押されるのはこのような人々です。

黙示録7章4節　それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、一四万四千人であった。

救われた多くの異邦人がいたにもかかわらず、印を押すために創造主が選ばれたのはイスラエル人だけでした。「あなたは立ち上がり、シオンをあわれんでくださいます。今やいつくしみの時です。定めの時が来たからです。」〔詩篇102篇13節〕。新しい神殿は建設中でした〔黙示録11章1節〕。それは「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。」―主の御告げ。〔イザヤ書59章20節〕とのイザヤの預言がまさに成就する時でした。実に忠実で準備の出来たイスラエル人の指導者が証と指導者としての使命を戦略的に果たすために呼び出されるに違いありません。

しかし、なぜ一四万四千人という数がこのように強調されているのでしょうか。聖書の中でこの数に言及されているのはここだけです。そして、各々の部族から一万二千人ずつで、イスラエルの十二部族に基づくものです。そして、彼らの名は新しいエルサレムの土台石に刻み込まれるはずの名です〔黙示録21章14節〕。イスラエルの十二部族の名が門に書き込まれているだけでなく〔黙示録21章12節〕、エゼキエル48章3～35節の千年期のエルサレムの門にあるのと同じです。

千年期に十二使徒たちは「十二の座についてイスラエルの十二の部族をさばく」〔マタイによる福音書19章28節〕と主は約束されました。たとえ部族の多くの人々が長い間離散していて、現在十部族を「失われた部族」と呼んでいるとしても、「創造主は系図を保っておられ、ちょうどよい時に、もう一度すべての部族を判別することができるのです。各々の部族は千年期に割り当てられた地理的境界をもつのです」〔エゼキエル書48章〕。

こうして、千年期の間、各部族は各々自分の土地をもち、十二使徒の一人が裁判官として奉仕します。しかしながら、使徒は復活して栄化された人々で、国籍は天にあります〔ピリピ人への手紙3章20節〕。したがって、地

上の民としての身分はその一部に過ぎないのです。そこで、おそらく天の代表・担当者である使徒と連絡をとるために、各部族に実際に地上で指導者として奉仕する人々を必要とします。もし各部族に一万二千人の準備された指導者がいるなら、その場合、各自はこの能力を用いて一カ月奉仕します。千年の間、一年に十二人奉仕します。これはただの憶測に過ぎませんが、少なくとも創造主が一四万四千人を準備される理由かもしれません。現時点では、創造主のみが御存知の他の素晴らしい理由があるのかも知れません。

証人たち

黙示録7章5節 ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人。

部族の名が一つ一つあげられ、各部族一万二千人が印を押される時、ヨハネは各部族の名と印を押された順序を記録します。ルベンがイスラエルの最年長の子であったにもかかわらず、ユダが最初に挙げられています。その理由は歴代誌第1の5章1節2節で論じられています。「イスラエルの長子ルベン―彼は長子であったが、父の寝床を汚したことにより、その長子の権利はイスラエルの子ヨセフの子に与えられた。系図の記載は長子の権利に従って行なうものではない。ユダは彼の兄弟たちにまさる者となり、君たる者も彼から出るのであるが、長子の権はヨセフに帰したからである・・・」

ヤコブの第4子ユダには王権が与えられて〔創世記49章10節〕「私たちの主が、ユダ族から出られたことは明らか

です」〔ヘブル7章14節〕。各イスラエルの十二部族を裁く十二使徒は、知り得る範囲では、みなユダ族から出ています。それゆえ、ユダの子孫一万二千人が最初に、ルベンの子孫が第二に印を押されたのは適切です。なぜ創造主がヤコブの第七子〔そばめシルバの第二子〕を三番目にあげているかはわかりません。彼に関するヤコブの預言は「ガドは軍勢これにせまらんされど彼反つてその後にはせまらん。」〔文語訳創世記49章19節〕でした。

黙示録7章6節 アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、

アセルとナフタリはヤコブの第8番目と第6番目の息子でした。マナセはヨセフの第一子で、ヤコブの第十一番目の息子でした。彼らはおのおののシルバ、ビルハの子とラケルの孫でした。ここでもあげられている順序の理由ははっきりしていません。おそらく、イスラエルのおおのの部族が印を押されるため終わりの日にイスラエルの地に帰って来る順序でしょう。

各部族の押印についてはすべての陳述を完全に繰り返している明確な理由はないようです。すべてに同じ情報を与えるためには1節2節で充分だと思われれます。それにもかかわらず、創造主は理由に合わないことは何もなさらないし、ヨハネもいちいち名をあげてを意味があると考えなければ、このように細かくいちいち名をあげて記録しなかつたはずです。明らかに、すべての人が知っておくべき重要なことは、いかなる疑問があろうとも、すべての個々のイスラエル部族は時代を越えて創造主に護られてきたこと、創造主は今日のイスラエル人がどの部族に属するのか(間違ひなく男系で受け継がれてきた系図による) 個々人がそれを知らなくてもそれを知っておられるのです。

イスラエルの十二部族が聖書に何回も(実際にはほぼ30回) 型通りにあげられていて、名をあげる順序がほとんどすべての場合で異なるのは重大です。もし他に特別なことがなければ、ユダを除いて—この順序は特に関係がないことを告げています。彼らはみな創造主の目から見ると同じように大切です。

黙示録7章7節 シメオンの部族で二万二千人、レビの部族で二万二千人、イッサカルの部族で二万二千人

ヤコブの第二子と第三子のシメオンとレビは、しばしば一緒に書き記されています。しかしながら、レビは祭司の部族で、彼の子孫には、約束の地に割り当てられた地形としての地域は元々ありませんでした。祭司とレビ人として彼らはいろいろな部族の地域すべてに特別な町が与えられました。すべての世紀を通じてイスラエルの霊的指導者として、彼らはこの特殊な奉仕のため印を押された人々の中に含まれることが期待されるのは当然です。

一方、ダンの部族からはだれ一人あげられていません。後の日のダン族には一人もこの使命にふさわしい人はおらず、準備もできていなかった、というのが推論の結果です。しかし、ダンの部族が保たれていることは、エゼキエル書48章1節の千年期での土地の分配で、その最初にあげられている事実からも明らかです。ダンは約束の地で偶像崇拜に陥った最初の部族でした〔王師記18章30、31節〕。この異邦人たちの遺産は百世代たつてもなおはっきりと表われています(申命記29章18〜21節にある警告の記事)。

しかしながらダンでさえ回心する時が来ます。「こうして、イスラエルはみな救われる、ということですから書かれている通りです。『救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。』〔ローマ人への手紙11章26節〕。

黙示録7章8節　ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、印を押された者がいた。

ユダが最初であったように、ヤコブの息子で一番年下のベニヤミンが最後にあげられています。ユダとベニヤミンはレハブアムとヤロブアムの時代に〔列王記12章16～24節〕北王国イスラエルを形成するために十部族が分かれた後、ユダ王国に残されたのは二つの部族でした。エフライム部族がイスラエルの十部族の中で優勢になったので、北王国は、しばしばエフライムと呼ばれました。しかしながら、エフライムはマナセと同じくヨセフの息子でした。ヨセフはルベンにより没収された二重の遺産を譲渡されました。こうして、エフライムとマナセは伝統的におのが十二部族の一つとして認められました。そしてレビは十二部族の一つとは考えられていません。しかしながら、この列挙で、おそらく、すべての十二部族がもう一度結び合わされる事実を強調するため、エフライムはヨセフと呼ばれています。エゼキエル48章1～29節の千年期の地理上の土地の分割で、レビ、ダン、エフライムとマナセを含む十三部族すべてが分け前をもつでしょう。

しかしながら、最後にエルサレムの門に付けられる最終的な名称は、元来の十二部族、すなわち、ヤコブの十二人の息子の名〔エゼキエル書48章31～35節〕となるでしょう。そしておそらく、永遠の都、新しいエルサレムでも同じ様になるでしょう〔黙示録21章12節〕。

大患難の殉教者たち

黙示録7章9節　その後、私は見た。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゆるの枝を手にとって、御座を小羊との前に立っていた。

ヨハネは地上における使命のために十四万四千人が印を押されるのを見ました。さて、ヨハネはイスラエルの各部族からの一萬二千人を見ていたし、天には御座の前に立っていて、どんな人も数えることの出来ない大群衆を見ました。

これらの群衆はユダヤ人ではなくて、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから来た異邦人たちでした。キリストの大宣教命令は、あらゆる国の人々を教える〔マタイによる福音書28章19節〕ことであり、創造主の御国の福音が「すべての国民にあかしされ」〔マタイによる福音書24章14節〕るため宣べ伝える時を約束するものでした。その時この時代の終わりが最終的に来るのです。この点で、福音は明らかに「地の果てにまで」宣べ伝えられ〔使徒の働き1章8節〕そして、ある人々は実際にすべての部族、国語からキリストに勝ち取られます。

これらの人々がみな白い衣をまとっている事実は、彼らには患難期の初期に殉教の死を遂げた人たちをも含まれていることを示唆しています。なぜなら、彼らは白い衣を与えられていたからです。彼らはその証のために殺される他の人と一緒に勢揃いさせられるはずで、彼らに加えられるはずです〔黙示録6章11節〕。彼らもはや祭壇の下ではなく、棕櫚〔シクロ〕の枝をふりながら（おそらく最初の「棕櫚の日曜」で予兆されている）

御座の前に立っている事実は次のことを指し示しています。すなわち、この場合、ヨハネが見たのはなお將來のことで、患難期の終わりに、すべての殉教した聖徒たちが皆御座の前に集められていた時です。

聖書本文では明確には述べられていませんが、その特別な奉仕のため印を押された一四万四千人のユダヤ人をヨハネが見たすぐ後に、贖われた大群衆を見ている事実は、因果関係を強く示唆しています。本当に救われ主イエス・キリストにある信仰で生まれかわり「完全なユダヤ人」になったユダヤ人は、キリストの力強い証し人となります。私たちは、黙示録11章の二人の証人の全世界に及ぼした影響で完全に補われた、世界中にある大患難の厳しい影響と共に、十四万四千人の証が、今や御座近くにいる大勢の異邦人の回心者の説明となり得ると考えてもよいでしょう。

黙示録7章10節 彼らは大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの創造主にあり、小羊にある。」

このような大群衆が実際に大声で叫んだことがあります。創造主を讃える讃歌——「私たちの創造主に救いあり」の賛歌は、本質的にホサナという叫び声と同じです。それは別の大衆が、しゅろの枝を打ちふり、王としてキリストを認めた時、いわゆる勝利の入城をされた棕櫚の日曜日の叫び声でした(「ヨハネによる福音書12章13」)。

黙示録7章11節 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し創造主を拝して、

ヨハネは、御座のまわりの同じような叫び声と讃美の歌をすでに記録していました(黙示録5章9、14節)。すでに示したように、あの場合、特に二十四人の長老によって表わされている甦った聖徒たちと、携拳された聖徒たちすべてが聖なる御使いたちすべてと一緒にでした。時は七年の大患難期の最初の裁きの直前でした。

この場合、これらすべての人々には、地上のすべての国民、部族から集まった新しい群衆が加わりました。これらすべての人々は明らかに長老たちとは異なっています、それ故、長老たちによって表わされている復活した信徒の群れではありません。これは大患難が始まった後に天の御座に来たグループです。前に述べたように、患難時代にクリスチャンになり、その後殉教の死を遂げた人々からなっているのは明らかです。

黙示録7章12節 言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの創造主にあるように。アーメン。」

今回は大群衆がアーメンで始まり、アーメンで終わる七重の栄光を讃える讃歌を急に歌いだしたのです。創造主に帰せられる性質のおのおのは、もともと定冠詞が先についていて「the blessing, and the glory…」で創造主は存在する賛美と栄光すべてを受けるに値することを強調しています。創造主はすべての創り主、すべての救い主、それゆえすべてを受けるに値する方です。

黙示録5章12節の賛美の宣誓証言には一つの例外がありますが、ここ7章12節にある賛美を帰せられる方として同じ七つの特質があります。5章12節には小羊が「富」を受けるにふさわしい方と裁定されています。7章12節で、創造主は「感謝」を受けています。贖われた患難期の殉教した聖徒たちは、創造主が全世界の

富をすべて所有しておられることを知っています。彼らは、創造主に「感謝」をささげることが何よりふさわしく満足すべきことであることを見出しているのです。

黙示録7章13節 長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。」と言った。

白い衣をまとった群衆と冠りをかぶった長老たちとの間には明らかな区別があります。長老がヨハネに尋ねた質問は、明らかに人々の関心を引くための修辭的質問で、教育的知識に関する重要な情報を与える機会として意図されています。ヨハネはまだ患難期の後半に地上に起こる出来事を見ていないので、キリストを信じるようになった大勢の人々も、彼らを殉教に追いやったすさまじい迫害を見ていなかったのです。むしろ、この挿入された幻で、ヨハネは贖われた大群衆に最後に起こる結果を見るために最後の時に前もって連れて行かれたのです。

黙示録7章14節 そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです。」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたので。

ヨハネは、長老の質問が人々の関心を引くための修辭的性質をもつことと、栄化された聖徒たちの中での彼のすばらしい立場を認めて、ヨハネは期待して答えを待っています。ヨハネが告げられている驚くべき事

実は、この途方もない大群衆が「大きな患難」から抜け出て来たということ。彼らは（彼ら以前の多くのクリスチャンたちのように）厳密にはその生涯で大いなる患難を耐えキリストに仕えた人々ではありません。大患難を通り抜けた人々でもありません。むしろ、彼らは「その患難」その大患難」から天にある御座に移されたのです。

語られているその大患難は、キリストが十字架に架かれる少し前〔マタイによる福音書24章、マルコによる福音書13章、ルカによる福音書21章〕に、オリブ山で語られた預言的講話の時期そのものの言及に他なりません。「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」〔マタイによる福音書24章21節〕

この引用での「その時」ということばは、マタイによる福音書24章15節の「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。）」に結びつくのです。すなわち、大患難は「荒らす憎むべき者」が聖なる所に立つ時すぐに続いて起こります。その場所とは大祭司と創造主が会うために設立された場所、宮にあるのです。「荒らす憎むべき者」という用語は特に偶像崇拜に対する特別な言及です。

黙示録13章でこの主題はさらに多くの検討がなされています。ここでの要点は、大患難は将来のある定まった時を指し、聖なる所に荒らす憎むべき者が立つことで始まり、王国を始めるためにキリストの地上への再臨によって終わります。「だが、これらの日の苦難が続いてすぐに、……人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです」〔マタイによる福音書24章29、30節〕。

天にいる大群衆は、この大患難から来るのです。いやしくも世界が見る最も大きい苦しみと迫害の期間に、かつて見たことのない真の悔い改めの最大の高まりが来る時になるのは特筆すべきことです。

いずれにしても、注意と勧告の強いことばは的を得ています。この贖われた大勢の人々は、携挙の時まだ救われていなかった人々から出てきたのです。携挙にあたり、生きている信徒が主と共にいるために世から連れ去られます。しかし、携挙前に福音を聞きながら福音を拒否した人々は、これらの人々の中にほとんどいないのはほぼ確かです。このことは、この同じ時を取り扱っているテサロニケ第二の手紙2章10節から12節でも教えています。「……なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ創造主は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。それは真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」

ちようど、死がキリストを拒否している人々が救われる可能性のある日を終わらせるのと同じ様に、福音を聞き知りながら福音を拒否した人々の救いはおそらく携挙で終わります。それにもかかわらず、福音を一度も聞いたことの無い人々、また受け入れるか拒否するかについて十分に理解していない人々が少なくとも世界中に現在20億人はいます。患難期に大勢の回心者が狩り集められるのはこれらの人々の中からです。一四万四千人の印を押されたユダヤ人の証だけでなく、携挙された信徒が世に残した聖書や真のクリスチャーの書いた資料とそれに加えて世界に起こっている大災害と恐らくその他の影響が、キリストを信じ救われるためにこれらの人々を導くのに用いられるでしょう。多くの人々、おそらく最も多くの人々が患難期が終わる前に生命を失い、彼らの魂は天にある祭壇に他の人々と一緒に白い衣を装わせられて集まっています〔黙示録6章9、10節〕。生き残る人々は千年期に入り、生きつづけますが、このことに関するもっと詳しいことは黙

示録20章との関連で扱います。

これら殉教した患難期の聖徒たちは、「その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです」。勝利した聖徒の白い衣は「聖徒たちの正しい行ない」〔黙示録19章8節〕を表わすと後で言われています。しかし、聖徒の正しい行いでさえ、創造主の小羊キリストの流された血のゆえに初めて価値があるのです。この患難期を通して救われた人々は、患難期前の人々と同じ厳格な基準で救われるのです。そのことについて言うと、いつの時代でも救いの基準は、人の子（イエス・キリスト）の罪を贖うための死と義を基にする復活によるのです。

黙示録7章15節 だから彼らは創造主の御座の前にいて、聖所で昼も夜も、創造主に仕えているのです。そして御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。

殉教者は「生命の冠」と呼ばれる特別な報酬を受けます〔ヤコブ1章12節、黙示録2章10節〕。加えて、これら患難期の殉教者たちは、やがて来る千年期の間、創造主のまさにおられるところに住まいを持つ特権を持ち「聖所で昼も夜も」創造主に仕えるのです。この約束は祭壇の下にある魂として、彼らの眼前の状況を越えて先を考えています。新しい地球では、「そこには神殿」もなく「夜もない」〔黙示録21章22節、25節〕のです。したがって、この特別な約束は千年期に成就されるに違いありません。千年期には、エルサレムに主が住まわれる大いなる神殿が実際にあるのです〔エゼキエル書43章1〜7節〕。すべての栄化された聖徒たちは、千年のキリスト統治の間、キリストと共に王としてまた祭司として奉仕しますが〔黙示録20章4〜6節〕、イエスの証しのため首を切られたこれら患難期の聖徒たちは、この特別な所で祝された奉仕にあたります。

黙示録7章16節 彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。

患難期の最も厳しい迫害の間、聖徒たちは食べ物や飲み物を買うのを法律で禁じられます〔黙示録13章17節〕。そして彼らはいつでも捕えられ殺されます〔黙示録13章15節、20章4節〕。これら多くの人々は、確かにユダヤ人のクリスチャンのように荒れ野に逃げなければなりません。そして、彼らのできる最善のこととして住んでいる土地を去り、熱さと飢えと渇きで苦しみます〔黙示録11章4節、マタイによる福音書24章16節、イザヤ26章20節、21節〕。彼らの多くは、結局これらの苦難の下で死にかかっています。これらは、主が患難期の終わりに諸国の民を裁くために来られることと関連して、主が特に述べておられることと考えられます。「そして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、世の始めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渇いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたのです。……あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』〔マタイによる福音書25章34〜40節〕。

ここで主が語っておられる王国はおそらく千年王国です。彼ら自身大きな危険を犯して患難期の間上述のように迫害されている人々を助けるのです。このような生まれながらの肉体で地上のこの素晴らしい王国に入る特権^{あすか}に与る可能性があるのです。

黙示録7章17節 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、創造主は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。

「いのちの水の泉」というこのことばは確かに聖書（創造主のことば）の中で最も美しく、恵み深い約束の一つです。新しいエルサレムには元気を回復させる水が豊富にあり、その住民は決して二度と渇くことはありません。混じりけのない水からなる川が、小羊の御座から豊富に供給され流れ出て大きな川となり、全地に水を供給します〔黙示録22章1節、2節〕。ヨハネ自身、キリストが十字架にかかられた時、槍で刺された小羊のわき腹から血と水が泉のように流れ出るのを見ていました〔ヨハネ19章34節、35節〕。そして、それを驚きをもって解説しています。後でヨハネは「御霊と水と血」との三つが一つに結びつくとの証を書いています〔第1ヨハネの手紙5章6〜8節〕。この三つは信じるすべての者に対する創造主の素晴らしい贈り物、永遠の生命について語っているのです。御霊は永遠の生命を分け与えます。水は永遠の生命を保ちます。血は永遠の生命を保証します。そして、カルバリの丘で開かれたあの生命の泉は、御座の真中におられる小羊御自身から永遠に流れつづけるのです。水は自然の水ですが、主がずっと昔、井戸のかたわらであの貧しい婦人に約束されたような霊的な水でもあるのです〔ヨハネによる福音書4章10〜14節〕。キリスト御自身が生命の水で、魂の渇きを永遠に満足させるのです。ちょうどキリストがお創りになった物質の水が、キリストが愛された人々の栄化された身体の必要をも永遠に満たすかのようです。

まさに千年期の神殿から流れ出る新鮮な水が、大河の流れとなるように〔エゼキエル書47章1〜5節〕、おそらく、患難期に起こる途方もない地殻の隆起によって出来たエルサレムの帯水層（地下水を保存する砂、じゅり、多孔性の岩などから成る層）に、巨大な地下の貯水槽から水を出すために穴があげられるのです。この文字通りの川は、新しいエルサレムにある小羊の御座から流れ出る大きな生命の川の型なのです。

キリストはすべての渴きを取り去るだけでなく、すべての飢餓もすべての涙も取り去ります。葬られた小羊が「その群れを飼」〔イザヤ書40章11節〕う偉大な羊飼いとなります。キリストは彼らの目からすべての涙をぬぐい去ります〔黙示録21章4節〕。クリスチャンはすべての時代に、特に迫害の時に、多くの涙を流してきました。そして彼らの財産が略奪されるのを見、愛する者が死に追いやられるのを目撃し、キリストとその救いに導きたいと願っている人々の軽蔑的な拒否を経験して涙を流して来ました。けれども、最後に、新しい地ですべての涙は創造主御自身によってぬぐい去られ、キリストの御前に喜びが満ち〔詩篇16篇11節〕、以前のことは「思い出されず、心に上ることもない」〔イザヤ書65章17〜19節〕時が来るのです。

これらの約束はすべての信者に当てはまります。黙示録の最後の章でくり返し補足説明をしていることからも明らかです。けれども、これらの約束は特に新しい苦しみに会っている信者たちにとって貴重で、彼らを勇気づけるのは確かです。彼らは、まもなく来ようとしている大患難のきびしい日々を荒野の避難所や地下の隠れ家において、これらの約束を読むのです。